

敦煌資料と高山寺『西遊記』第十七章の類似点

Victor H. Mair

(ペンシルバニア大学)

日本だけに残る、中国文学を研究する上で特筆すべき多くの資料の中に、京都の高山寺に保存されていた、『西遊記』に関する有名な木版テキストが二冊ある。このテキストの成立は十三世紀か、或いは、それ以前にさかのぼることができる。それらには少々の違いはあるが、明らかに同じ話の校訂本であるので、ここでは両方とも高山寺『西遊記』と呼ぶことにする。

高山寺『西遊記』は唐の僧玄奘（596～664）の旅を題材とする最も古い現存本であり、中国小説史上、たいへん意義深いテキストといえる。あの有名な明の呉承恩（1500?～1582?）の小説に出てくる孫悟空などのいろいろな話が含まれており、やや変体漢文調の唐突な古文体で書かれているとはいえ、初期の中国民間小説を研究する上で重要なものとなっている。なぜならこのテキストは、ある話がどのように成立していったかを調べる貴重な機会を与えてくれるからである。

高山寺『西遊記』は、もともと十七の短い章に分かれ、そのうち第一章は欠けている。第二章から第十六章までは、法師と弟子たちの経典を求めてのインドへの苦難の旅が描かれ、最後の十七章の一行の帰路に関するところには、本筋とあまり関係がないのに、皮肉にも最も長い挿話の一つ含まれている。

法師と弟子たちがその帰路、山西省の河中まで来たとき、王という長者に出会った。王は31才で最初の妻に先立たれ、孟氏という後妻をもらっていた。彼にはすでに癡邦という息子がいたが、後妻も居邦という名の男の子を生んだ。長者は後妻に、くれぐれも癡邦の面倒を見るようにと言ひ残して、商用の旅に出た。

半年後、妻のところに癡邦の面倒をよく見るようにという手紙が来たが、居邦の事は一言もふれていない。妻は怒ってその手紙を裂き、夫が癡邦に送って来たおもちやも叩き壊してしまった。妻はこの継子を亡きものにしようと決心し、その恐るべき企てに春柳という名の女中の助けを借りることにしたのである。

癡邦は恐ろしい試練に三度出会うが奇跡的に切抜けることができた。はじめに、癡邦は大釜に入れられ、三十貫の鉄の蓋をされ、継母と女中に三日三晩ずっと煮立てられた。その後、重い蓋を開けてみると、癡邦は飛び上がって「はい、なんでしょうか」と叫んだ。言うまでもなく、継母はまごついて、どうして生きのびたのかと訊うた。癡邦が言うには、継母と春柳が蓋をした後、大釜の中に蓮花座が生じ、その周りを冷たい水が囲み、彼はその真ん中で横になり坐ったりのんびり過したとのことであった。

継母が大変元気なのを見て、父が帰ってきた時に告げ口をされると困ると恐れた継母と春柳は、今度は家の裏にある果樹園に子供をつれて行き、癡邦が桜ん坊を食べようと口を開けたところで、二人の女は彼の舌を鉄鋏で切り落してしまった。こうすれば父親に告げ口できなくなると考えたのである。流れ落ちた血は地面を真赤に染めたが、翌朝、二人が癡邦の名を呼ぶと、彼はちゃんと答えた。継母がどうして話せるのかと訊くと、彼は夜中に神饌仏王が現われ、持って来た葉で彼の舌をつなぎ合わせたのだと述べた。

次の試練として、癡邦は外の倉庫に食べ物なしでひと月間、閉じ込められてしまった。二人の女が倉の戸を開けて

みると、彼は飛び上がって「はい、なんでしようか」と、大声で返事した。継母がいったい何を食べていたのかと訊くと、彼は鹿の乳が空から降ってきたのだと答えた。

三度目の試練として、女達は洪水の川を見に癡邦をつれて行き、物見の塔に登らせたところで春柳が少年を激流に突き落とした。この直後に父が帰り、息子がおぼれ死んでしまったらしいと聞いてひどく悲しみ、彼は息子のための法会と精進の日取りを決めた。

インドのラージャグリハより経典をたずさえ帰路についていた法師と六人の弟子達は、丁度、その法会に出席した僧をねぎらう宴会に加わった。ほろ酔いかげんの法師と猿の弟子は、スープを注文し、長者は早速、魚をとり召使を送った。その際、魚は少なくとも十貫の重さのものでなくてはならないと、付け加えた。

長者の召使いは、漁師から直接、大魚を手に入れる事に成功した。長者が法師に魚をどう調理しましょうかとたずねると、法師はナイフを渡してくれれば自分ですると答え、法師はそこで長者と法会に集まった者達全員の前で、この魚が大罪を犯したと告げた。いったい、どんな罪なのかと訊かれ、法師はその魚が前日に長者の息子の癡邦をのみこんだ事と、少年がまだ魚の胃の中で生きている事を明らかにした。そこで、全員が立ち上がり法師を取り囲んで、彼が大魚を二つに切るところを見た。すると、法師が言った通り癡邦が飛び出し、前とかわらず元気に話し始めたのである。長者は大層喜び、尊敬と感謝の気持ちから手を合わせた。この挿話は、この後、長者と法師の応答で終わっている。

この気の毒な癡邦の話は、高山寺『西遊記』全体の中ではまったく浮き上がっていて、いったいどこからこの話きたのかと、考えざるを得ない。もちろん、著者は法師をこのエピソードの中に入れる努力はしているが、癡邦の話

が『西遊記』に無関係であるという事実は隠しようがない。

この高山寺『西遊記』の第十七章を読んでみると、擧身自撲（自分で自分の体を打つこと）と至孝という言葉が並んで使われていることに気付く。はじめの言葉は悲嘆の意味で、敦煌文学の中によく出てくるが、後者は、伝説の皇帝舜の少年時代のあだ名である。敦煌のテキストと舜子との関連から、ただちに、舜に関する敦煌の話の中で舜も癡邦と同様の試練を受けたことを思い起こさざるを得ない。

ペリオ敦煌資料二七二一（I三六）の裏（左）頁には（終りの所で）「舜子至孝変文一卷」という題がつき、九四九年の日付けが奥付に見られる。この一巻の表（右）頁には色々な記録文、玄宗皇帝（七一三～七五五）の *Vaiac-cadedra* 経の徳讃文、孝経の十八連が書かれている。舜子の話の筆記者は、この孝経から多少の示唆を受けたであろうと考えられる。

ペリオ資料二七二一（I五二）の初めは欠損しているがその部分は別の筆記者によるスタイン資料四六五四で補うことができる。この資料の冒頭には、「舜子變一卷」という題がつけられ、九四六年の日付けのある、この舜子の話は、いろいろ雑多なテキストの間にはさまれた形で入っているのである。舜子の話の後、突然文章が途切れて經典からの考行に関する小文が続いているのも、全くの偶然ではないのかもしれない。そこで、ここでは都合上、ペリオ資料二七二一とスタイン資料四六五四を、舜の至孝の話の「変文」テキストと呼ぶことにする。

しばらく、敦煌変文テキストの舜子の話について、高山寺のエピソードに似ている部分をあげながら論考をすすめてみたい。変文テキストは高山寺『西遊記』第十七章と同様、舜子が母を失い、父が商用の旅に出るところから始まっている。高山寺の話と同じく、父は三年間留守をし、癡邦のように舜子は三つの試練をのりこえてゆく。この二つの

話の大きな違いは、舜子の父が試練の始まる前に帰宅し、かえって企ての助けをしようとするところにあります。この相違は舜に関する伝説からの影響とおおいに関わっているにちがいない。この事について、以下に論述する。

第一の試練で、舜子は家の裏にある果樹園（癡邦の第二の試練参照）につれて行かれ、紅桃（高山寺テキストでは桜ん坊）をとっていた。舜子が登った木の下に立っていた継母は、わざと黄金色のヘアピンで自分の足の裏を突き、舜子が鋭いとげを埋めておいたと言つて、父親におしおきをするよう進言した。そこで父は太い針棒で舜を打ちつけたのだが、インドラに守られ、舜は奇跡的に無傷であった。

舜子が魔術を使つて傷をおわなかつたというので継母はますます怒り、二・三ヶ月後、舜子を亡きものにするため、新たな企てを練り上げたのである。彼女はまず夫に言つて、舜子に裏の中庭にある、空の倉の修理をさせることにし、その倉に火をつけ、舜を焼き殺そうと謀つた（高山寺テキストの第二の試練参照）。舜子は倉に行く前に、しつこく火を塗るのに使うための編み笠を二本もらつていった。彼が屋根の上にいる時、父と継母の連れ子、象兒の三人が倉に火をつけたのだが、火の手が舜子に襲いかかつた時、彼は編み笠をバラシュート代りに使い、うまく地面に降りたつた。この時は、地の精が舜子を守つたのである。この火の試練は、高山寺の癡邦の話にある第一の試練に似通つてゐる。

舜子が魔力を持つと思つた継母はますます怒り、この憎らしい継子を亡きものにする次の企てを十日以内にならせたのである。継母は夫に言つて、応接間の前にある枯れた井戸を舜子に掃除させるようにした。井戸に大きな石で蓋をすれば舜子は死ぬだろうと考えたのである。これを実行に移した時、今回もやはり黄色の龍に化したインドラが、舜子を東の隣人の井戸につながる壁穴に導き助け出してしまった。舜子は井戸の水を汲みにきた老女によつて引き上

げられた。この水の試練は、高山寺『西遊記』の第三の試練に似通っていると云える。

この後の二つの話は癡邦の話とは異なっている。癡邦は魚の腹より出て父と再会するが、舜子はずっと後になって早魃の際、乞食同然となった父（と継母）に米を与えて感謝されることになっているのである。

魚にのみこまれた子供がおぼれずにすむというモチーフは、インドのバクラの話の中にその源がある。ブッダゴース（五世紀前半）のパーリ語で書かれた、*Papaccasudani Majjhimanikayaṭṭhakatha* 第一二六段の中では、バクラはコーサンビーの裕福な商人の子として生まれた比丘であった。乳母が、生後五日のバクラをヤムナー川につれて行き洗っていると、魚が寄って来て、子供をのみこんでしまった。しかし、赤子は奇跡的に無傷のまま、魚の胃の中で安らかに眠っていたのである。後に、その魚はベナレスの漁師に釣られ、千金の価で他の裕福な商人に売られた。商人の妻が魚の腹を切り開くと、金色の肌の子供が出てきたので、妻は子供を夫の元へつれて行き、夫は王様に赤子を差し出した。話を聞いた王様は、商人夫婦にその子を養子にするように言いつけたのである。このニュースは、コーサンビーの実際の両親の耳に入り、両親は名乗り出たのだが、養父母は子を手離そうとはしない。そこで王様は、子供が二組の夫婦に属するというにしたのである。（その子は二家族という意味を含んだバクラという名をつけられている）

このインドの話が、どのような経路を経て高山寺『西遊記』第十七章となったかは、そのおおよそが判っている。中国の僧が紀元四四五年の直前にこの話をコータンで聞いており、話は固有名詞の抜けたインドの原形に近い形で、『賢愚経』の中に取り入れられているのである。次にこの話が出てくるのは、五世紀後半の『付法藏因縁伝』（大正五〇（二〇五八）三〇八a）の中である。この話には、いじわるな継母、試練の数々と、漁師の釣った大魚の腹か

ら父親がバクラを救い出す話が含まれている。そして六世紀初めの『経律異相』（大正五三（一一二二）一〇一a）に至り、高山寺『西遊記』第十七章の話にある、いじわるな継母、三つの試練（煮立った釜に入れられること、焼かれそうになること、淵に投げ込まれること）、父親主催の法会で魚の腹の中から救い出される、という全要素がそろっているのである。この話の源泉は『譬喻经』と簡単に記されているが、もちろん『経律異相』の話が、バクラの名前の登場しない現存の『賢愚经』から伝わってきたとみることはできない。それゆえ、バクラの話は二つのルートを経て中国に伝わってきたと考える他はなく、いずれにしても、時間の経過と共に中国人編集者の手で、この話が徐々に変えられていったことは明らかである。

さてここで、変文テキストから舜子の話に戻りたい。敦煌資料の中で盛んに写されて非常に人気のあった話としては、『二十四孝子伝』があげられる。現存する七つの資料には実際にはこの題はつけられていないが、伝記の総数は二十四で、後世の同じ話が『二十四孝子伝』と呼ばれていることからして、このように題をつけて差し支えないと考えられる。最も重要かつ欠損の少ない資料であるペリオ二六二一の終りに『事森』という題が書かれているが、どういふわけかこの事実は、今日までずっと見逃されてきたようである。

唐の時代より、二十四人の孝子たちはいろいろなグループに分けられたり、その登場順を変えられたりしてきたにも関わらず、舜帝の話はいつも一番初めに出てくる。舜帝は一番古い時代の人であり、親がどんなに卑怯でも、親孝行を絶対に忘れない、その態度は孝子の鑑であるから当然と言えよう。

これら敦煌資料『孝子伝』の舜子の話は、変文の1/4の長さとは言え、強い関連があると思われる。分量の違いは、『孝子伝』の筆記者が勝手に大幅に省いた箇所があるので、実際はそれ程でもないが、この省略がないとすると、『孝

子伝』は変文テキストの長の長さであったと考えられる。その上、現在残っている『孝子伝』の舜子の話の部分には二つの試練しか語られていないが、元来は変文と同じく二つの試練が含まれていたと思われる。『孝子伝』と変文における舜子の話の関わりは強さは、例えば、両テキストをしめくくっている唯一の詩である四行連句が全く同じということによってもうかがえる。又、両テキストとも澁井が洵井となるような、かわったつづりの間違いがくり返され、珍しい表現も両方に見られる。例えば、頑愚がという言葉は、両方とも間違つて書かれており、全体の文も、ほとんど同じである。

しかし、両テキストには見逃してはならない重要な違いが見られる。その著しい例としては、『孝子伝』の方には、変文にあるインドラや地の精による救出のことが欠けていることである。その上、『孝子伝』では、変文や高山寺『西遊記』にある父親の旅のことがみつけれない。さらに、変文では口誦文学特有の言いまわしが、『孝子伝』よりずっと多くくり返されている。したがって、変文の方に口詩体が多くみられることもうなづかれる。又、現存の『孝子伝』には倉焼きと井戸掃除の二つの試練しか書かれていない。前に述べたように、これは筆記者がうっかりしていたのかもしれないが、『孝子伝』がその典拠と仰いだ『史記』の中の話に従っているようでもある。

次に『史記』の舜の本紀より、関連した部分をあげる。

Le père de *Choen*, *Kou-seou*, était aveugle; la mère de *Choen* étant morte, il prit une autre femme qui enfanta *Siang Siang* était arrogant. *Kou-seou* aimait le fils de sa seconde femme et cherchait sans cesse à faire périr *Choen*, *Choen* lui échappa, mais lorsqu'il commettait quelque faute légère il se soumettait au châtement. Il servait scrupuleusement son père et sa

marâtre ainsi que son frère cadet; chaque jour il se montrait sincère et attentif et jamais il ne se relâchait.

Le père de *Choen*, *Kou-sou*, était pervers; sa mère était trompeuse; son frère cadet, *Siang*, était insolent. Tous désiraient tuer *Choen*; *Choen* était docile, et il ne lui arriva jamais de manquer à la conduite que doit avoir un fils, ni à l'amour fraternel. Quoiqu'ils voulussent le tuer, ils ne purent y arriver; quand ils cherchaient à l'essayer, ils (frappaient) à côté.

Quand *Choen* eut vingt ans, il fut renommé pour sa piété filiale...

Choen laboura sur la montagne *Li*: les gens de la montagne *Li* se firent tous des concessions sur les limites de leurs champs; il pécha dans l'étang de *Lei*: les gens qui étaient sur les rives de l'étang de *Lei* se firent tous des concessions sur les places de leurs habitations; il taçonna des vases d'argile au bord du Fleuve: les ustensiles fabriqués au bord du Fleuve furent tous sans défauts. Au bout d'un an, dans l'endroit où il habitait, il se forma un village; au bout de deux ans, il se forma un bourg; au bout de trois ans, il se forma une ville.

この引用文中の、二つの試練は『孝子伝』のものと同じである。司馬遷の『史記』では、舜は倉のしつこい塗りをさせられ、父の瞽叟が倉に火をつけた時、編み笠二本をつかって降りている。次に父と兄の象によって井戸の中に閉じ込められた時は、井戸の横壁に穴を掘って脱出する。『史記』と『孝子伝』には、舜の麗山での長期にわたる農耕生活等の表面的類似点がみられるが、話の精髓、全体の内容、そして配列からみて『孝子伝』はずっと変文に近いと言える。その証拠として、舜が井戸の底を掃除している際、インドラと共に、天から与えられたお金を父に届けることとは変文と『孝子伝』に見え、『史記』にはないことをあげれば、充分だと思われる。変文と『孝子伝』は、こういう細部に作り話的工夫が施されているのである。

しかしながら『史記』でさえも、その典拠となった『孟子』に比べ一段と文学性を増している。次聖(第二の聖人)

(三七二―二八九)の言葉をしるした中で、相応する箇所を見ると、次のような、短い文章となっている。

舜の両親は彼に倉をなおさせることにし、はしごを倉からはずしてしまい、瞽叟が倉に火をつけた。両親は又、舜に井戸を堀らせた。舜はうまく抜け出したがそれを知らない親たちは井戸を埋めはじめた。そこで象が云うには、「舜を埋める計画は自分の功績だ。親には牛と羊をとらせよう。そして倉庫と穀倉も。舜の楯とやりは僕のものだ。琵琶と弓もだ。舜の二人の妻も自分のものだ。

このように、舜の伝説は孟子と司馬遷の間の二百年という短い期間に、急速な成長をとげたのである。

舜子の試練伝説のものは、これ以上はあまり遡れない。『書経』の中の「舜典」には、試練のことがみあたらないが、『書経』は文学作品とは云えない。孟子は文学としての方向に話を一歩進め、司馬遷がその後を継いで、『孝子伝』に至っては歴史上の話と云う建前をまったく捨ててしまっている。破格と云うことは文学にはつきもので、舜子にはこうしていじわるな継母ができ、三回目の試練と神仙の加護等が語られることになるのである。舜子の話はその発達途中、民間芸文化、外来のモチーフを加えていったので、その結果、変文や高山寺『西遊記』第十七章のような趣向をこらした作品になったのである。

前に述べたように、高山寺テキストの癡邦の話は、敦煌変文の舜子の話の焼き直しである可能性が強く、この両者の間にはもっと細かい共通点もみられる。高山寺第十七章に出てくる「至孝」という強い表現は、変文の方のタイトルとテキストにも出てくる。さらに、前に云ったように、話の内容にそぐわないお馬鹿さんという意味の「癡邦」という名前と、舜子の継母の子、「象」が馬鹿であるというので「癡癩」と記されているのは、まったくの偶然の一致として片づけるわけにはいかないと思われる。「癡癩」という印象的な言葉は、舜子の古い話にはまったく使われ

ておらず、高山寺テキストの著者の注意を引いていたのかもしれない。変文でも高山寺でも継母を怒らすきつかけとなったのは、旅先より届いた父の手紙であった。こういう細かい類似点の一つや二つであれば偶然と云ってすまずことができるが、変文と高山寺テキストの類似点は、話の主筋の上で、さらにちよつとした言葉に至るまで多数に及び、どうしてもこの両者がなんらかの形で関連していたと考えずにはいられない。

もちろん、敦煌変文の話と高山寺『西遊記』第十七章の挿話とに直接関係があるとか、継子いじめの発展段階のどこかで直接関わりがあったと、ここで主張するのではない。現存の断片的資料の性質上、テキストの直接的関連性の証明は不可能と言える。ただ、民間小説のモチーフの総体的な発達のパターンであるとは言える。

『史記』から高山寺テキストに至る、試練を生きのびる継子の話の発達段階をたどると、次のように言える。まず、すでに相当発達した伝説の主要部分が準歴史のテキストの中に出てくる。次の『二十四孝子伝』ではもっと筋が通って洗練された話になる。敦煌変文に至り、もっとふくらまされ虚構化されて、インド的要素が少し加わった。その結果、父と死の床にある妻との感動的なやりとり、父の旅先からの手紙を届ける老人、舜子がしきりに凶書室へ行って古典（孝経も含む）の勉強に励んでいること等が語られる。こういった付加は全部著者の創作によるものである。最後の高山寺テキストでは、話は完全に仏教化され、舜の試練の話と云う枠組がはずさる。当然ながら孝行話の方は、その一端が高山寺『西遊記』に移植された後、独立して存続していくのである。

高山寺『西遊記』の第十七章が後世の『西遊記』の話の主流から忘れさられてしまったという事実は、この第十七章が、孤立したある地方固有の作品ではないかと思わせる。この見方は山西の河中県の地理的検証によってより強められてゆく。古い時代の河中は（八世紀前半から明のはじめまで）現在の山西省の永濟県にあたる。北のオルドス砂

漠から流れてきた黄河が東に曲がるところに永濟県は位置しており、唐の時代、河中は河東道の中にあつた。そこで高山寺『西遊記』が目的地長安を一〇〇マイルも通り越した河中に法師と従者達をおくのはおかしいということになる。これが実際に起こつたという歴史的証明もない。

高山寺テキストの地理問題がどこからきたにせよ、初期の『西遊記』の話はだいたい福建からきていることを忘れてはならない。高山寺『西遊記』の發達史の中でいつたいどういう位置を占めるのかは不明のままであるかもしれないが、第十七章の癡邦の話のように、今日までこうしてたくましく生き残つたことは、誠に幸いと云わなければならぬ。

中国民間文学研究の資料は惨胆たる状態にあるにも関わらず、我々は、このように一つのテーマについてその歴史的源泉からいろいろな変化変遷にわたるまでをたどることができた。この研究はたまたま二十世紀はじめに、日本の寺と敦煌で重要な資料が発見されたことによつてはじめて、可能となつたものである。こういった資料がなければ、古代中国民間文学におけるモチーフの發達に關しては、ほとんどと云つていい程、不明のままであつたと云えよう。この調査を通して言えることがあるとすれば、それは民間文学のテーマはいろいろな形や変形を取つて現われ得るということである。インドの不滅のバラクラ羅漢のイメージを加えた、かの著名な舜帝が、癡邦という宋の無名の民話の人物構想に影響を与えたのである。